



13
2890
6



門 へ 13
2890
卷 6



繪本報仇安達原冊之六



浪華

箕山

文亭主人著

門人

辞元斎叟校

第九編

忠六金部喜之 賊手子死す
箕太疾と養て村落に服せし

早川箕太高川習いぬ旅の勞ぞ 鎌倉の街末に旅宿し
疾と養て思ひ時を謀り 鄧亭の矢怪とて
これに旗亭の主悦こと見えぬ 斯く箕太の病
是とて常の養生とせしに不日よして二匹豆平愈
これに主従大よむるに合は 拙も復仇の志し専ら此に

昭和九年 七月九日 購求

夜も思ひ出さざれば十日計り是亦有りなきに亦又同日旅宿
のもの詰と聞は是はほむと相州の足柄山は子方と殺あり
吏人堵を檢する折る我行合しゆくさづり立とあり
其夏さうに女に近き邑の三木とふふのものなるが
良人の綿と南を因中とつに家夏ありと夫婦
路侶もこの山の少く行い道足柄山は登り漸く峯越す
おかし己申の下討の頃なりしが女は幸は積おらう歩
かゝ。夫因中よりいらく介抱せしに女は日のくれぬ中
よ山と下むとと思ふゆへ急ぐかたも積おさぬり
うぬを喉喝とおぼしぬれば因中より谷より下り水と汲

あゝんと棘垣より幸ふとてに汲水の七あがぬ
いりやんと瘰癧者もあらばと索るうち隙より所く破
儀の拾ひて水すれあげたてらるるて何はむん早く
吞ましと吃おむ飯は加麦や女房に斬殺され衣被
る禪衣あり鉢に血もたれ八月にこそは物子斬り瘰
すり軽びあてはるる形勢なり因中より黒目なるや
うくくゆも有る馬かき足と逸れ逃のびる幸ふも
是難とのがれとと因中とやり泣く吏人は
か繁は忙が道なれば路と軍のこ一行せしむる宿りの
人のと都にたは長を思ふ身とする一腰ありいりるよ

あゝんと棘垣より幸ふとてに汲水の七あがぬ



山崎の道



扱ハ八雲の徒徒ハ是極山のありは魅伏セリ。此の
方とま束むれば手指も何れんと主従の合々二人の
翌日は結亭と立退きなり。斯て皆太下忠六ハ相州
山江と行ほくに三日路を控へ陶後郡に及ばぬ
即疾後なれば若く折や天曇月籠りても
祈更過さるれば。もの孩もさぶらなず路中を不食
の上なれば十分は芳後て昔んを今ハ一歩も進ま
次傳の木根は跌倒たされ。昔みらると忠六は水
見は母の杖起そふ。此より人邑は程もあらず
よ今かくのどく。なば夜陰の気と受け冷気など

昌てハ悪りぬす。疾重なる此までの辛苦の上は百反と重
る。頼も仇も土ま達なれば身の養生と大切なり。一
健なるも岩思如逆りて。あつく志は刷り技換て
行りる。御く。愛甲村とよ。あきなりれば。あは
く。おむ。是邑の庄屋徳をり。よ方。一夜と也
へ。程り。早速。洋諾あり。の戸。開き。時。ハ。毎
三更。羊。過。さ。る。な。れ。ハ。圍。兜。の。もの。内。入。り。折。り。や。借。り。の。も
の。じ。も。虫。吟。が。が。主。人。情。を。り。の。言。つ。け。な。れ。ハ。是。非。か。く。心。と
を。り。気。と。つ。け。な。れ。ハ。皆。太。下。忠。六。ハ。大。な。力。と。得。て
飯。を。吃。す。る。も。及。ぶ。されど皆太下ハ一節もく。が。

あはつたのり

二二

二の舞榭と發し手足は一際送りぬ。忠六は大笑ありて發して
傍らへ乞ふ。氣とかり。答太房は掩ひ着てゝ。ひ抱ひ
とす。氣を。躑子大勢さるゝと。大煩渴とおびへるゝ。水を
とりぬ。ぬい傷寒もて。中と忠六は氣が煩。煩
徳右衛門。妻より情。よろこ。人かぬ。ぬ。家内のもの。子告。四
方物。夏より。気とつけ。たづぬ。ぬ。に。答太房は。す。や。く。寐る
や。す。ら。ぬ。ぬ。忠六。ゆ。ゆ。の。氣。と。ゆ。ゆ。何。の。話。の。席。ぬ。
徳右衛門は。諸子。樂主。従。て。他。と。志。系。の。もの。や。う。い。が。今。疾
ふ。て。若。い。昔。主人。よ。と。富。饒。家の。兒。あ。て。常。は。身。と。安
穩。は。持。笑。え。ぬ。家。隸。子。形。象。は。服。事。身。は。ぬ。布。と。交

口美食は飽て觀樂おやうおやうが。豈計んや。二親ともよ。
横虎は。送られ。是より。ゆ。ゆ。愈。從。て。其。他。と。復。んと
志。系。の。お。か。か。ら。ぬ。ぬ。千。辛。萬。苦。は。強。年。齒。七。長。た。よ。こ。ぬ。ぬ
心。配。な。れ。ぬ。ぬ。氣。が。數。千。たま。お。え。幣。も。て。か。ぬ。ぬ。ゆ。ゆ。さ
と。か。へ。る。に。徳。名。あ。つ。も。ま。ぬ。と。寫。を。泪。と。泣。め。あり。ぬ。思。お
偶。至。重。裏。の。輕。れ。ぬ。ぬ。不。思。儀。よ。あ。ち。の。怪。し。く。搖。え。る。よ。
さ。つ。よ。ぬ。ぬ。松。朧。も。々。り。折。け。重。重。裏。を。輕。ら。く。見。ぬ。ぬ
妻。の。體。め。列。衣。る。金。色。の。巾。着。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ
抱。き。來。さ。ぬ。却。つ。て。早。く。元。來。一。路。み。つ。り。ま。ま。糸。む。と
主。債。な。り。ぬ。其。よ。う。か。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ

行て来られよ病人ハ筆を元押つてとッバ忠六ハ直
又身がうらうら路一里をかりも是彼と草を二分して
るに一坐の菓積の土倉より小山に下りて大漢一人刀と帯
をさるがゆるぎ出途に立ちどまり忠六ハ眉をさるつて
汝がハ箱は何と素と云おもふ矢却くる是金を
帯がとんと金寶布と見えれば忠六さてハ彼奴めよ
拾れとる夏の陣念んと思しよ素より忠六ハ丈夫
の男られハ声もげもてよハ汝其金を拾てくれハ
連は遠とすべ。さあんハ汝が命危るとハ大
漢鐘の響がとる声して呵くと笑ハ汝が是金と

取がえとハ猿猴が月がさるよ素く今彼奴命あハ
這と去れとていハバ一刀ハ鬼と見えと刀首ハ手とりけ
立ちりる忠六ハハ終る色ハ汝悪ハ盗賊ハ名あ
ハ死後の咄しよとと。標間の大刀と被持ハ盗賊ハ
我ハ山川傳説とよ盗盗りハ早川答太郎ハ遣ハる
馬鞍の彼奴ハ是ハ親の敵とやあハるハ王
もよ素ね探しよと鎌倉の旗亭ハあハるハ
とめり又答太郎ハ母ハ秋と手ハかけハるハ
報名の川と昔ハ向ハやと冷笑ハ言ハれハ忠六ハハ
まハ憎ハ彼那ハ敵ハよハつて斬捨ハと討ハてハ

あつてつづつとつ



あはれいしうしうし

いんげん



あはれいしうしうし

いんげん

まや身をわたりて一電光石火と後手も見だす。横地とせり。
が。おのゝかりり忠六は只一刀は傳頭が爲す。西面とる。
死り。傳頭あまは収む。あまや。陣念ハ竹右を身あまは在
俱ま死ざる。莫所と忠六は。何州ともゆ。行先より。野
て。莊長徳を身ハ忠六のわたり。今や。いと待らる。飯。さ
内。ま。い。志。下。ぬ。藤。の。病人。と。抱。お。き。大。心。配。り。夜。宿。床
ぢ。ま。先。と。配。り。疾。人。の。湯。液。と。施。り。汗。を。と。あ。れ。ば。汗
ゆ。ま。を。拭。ひ。食。事。萬。の。先。と。つ。回。ら。ど。其。中。も。も
忠。六。の。飯。り。違。り。ぬ。ば。あ。や。煩。ら。る。は。務。の。報。也。聞。て
と。や。四。更。の。ら。ら。ぬ。り。躑。又。夜。白。も。ぬ。り。た。れ。ば。竹。右。太

郎。衆。中。より。忠。六。呼。び。よ。り。主。徳。を。り。り。何。の
利。す。ま。て。お。し。す。や。忠。六。ハ。只。今。宿。ま。何。を。あ。や。と。杖。を
お。し。す。や。と。し。竹。右。を。身。頭。と。奉。り。厚。を。く。よ。ま。を。回。た
す。や。今。朝。あ。ど。い。大。な。先。を。も。よ。く。執。り。先。も。は。く。あ。れ。ば
次。子。は。杖。を。付。る。や。折。り。眩。昏。より。何。う。と。心。を。つ。け
ら。れ。い。や。れ。れ。杖。を。定。て。介。抱。せ。し。れ。ぬ。夜。に。竹。右。は
何。ん。と。厚。く。穿。つ。り。ぬ。ば。徳。を。身。を。そ。れ。ハ。聊。か。と。あ
り。ま。す。去。り。ま。す。忠。六。莫。眩。夜。足。下。と。吾。家。へ。来。給
あ。ら。と。足。下。ハ。慄。々。馬。と。て。戦。寒。さ。さ。り。ゆ。り。今。衆。を
西。得。ぬ。ど。し。を。爐。の。下。へ。よ。せ。し。ぬ。い。ま。日。中。に。壺。を

忠六の傳頭

竹右

さうり。すやく。葉の山。客子も見へる。山。我々も例。又
有りて。さぐ。気とゆき。あり。が。忠六の。金。妻の。金子
着せよ。て。いらく。探。見。ま。裏の。隙。とけ。よ。め。が。扱
い。お。り。る。よ。極。く。を。慌。く。気。と。急。て。探。ま。べ。く。頼。り。く
い。病。者。も。気。と。配。り。と。よ。く。忙。く。家。を。あ。く。に。時。刻。に。之
更。羊。も。思。へ。今。も。飯。を。と。ゆ。我。々。も。何。や。と。り。か
皆。太。郎。の。致。す。一。頼。み。て。忠。六。飯。が。不。審。も。お。ま。ひ。な
す。い。夫。の。忠。六。か。了。達。く。心。急。り。も。存。る。り。何。も。告。か。好
る。れ。ど。貴。竹。も。も。其。こ。ろ。一。進。一。忠。六。の。行。所。も。少。も
下。さ。る。べ。く。碎。一。金。見。へ。ど。も。吾。疾。ひ。と。知。つ。徒。然

程。遠。く。探。行。む。の。に。あ。る。也。大。な。心。が。り。な。れ。が。忙。が。人。を
馳。せ。れ。と。只。當。り。頼。り。れ。ば。徳。右。衛。門。の。心。得。て。馳。人。を。遣。し。忠
六。の。行。方。と。大。抵。又。告。一。軍。一。走。り。り。竹。太。下。の。後。も。て
心。配。り。せ。に。も。朝。飯。も。あ。ま。ぬ。れ。ば。徳。右。衛。門。来。り。を。陰。に
て。も。進。む。や。と。い。ば。竹。太。郎。の。更。も。食。は。ら。な。気。色。も。非。也
躊。躇。も。折。り。稀。粥。を。炊。く。い。らく。の。采。と。契。て。探。し。よ
せ。り。な。り。夫。婦。の。ち。の。進。り。も。今。も。忠。六。の。か。り。に。送。り
れ。ば。嗚。り。何。う。と。心。配。り。お。い。さん。ま。の。一。や。い。食。も。啼。泣。し
復。申。し。殺。死。す。く。る。れ。が。快。あ。ら。な。い。と。勤。て。進。む。を
つ。ば。竹。太。郎。も。徳。右。衛。門。の。孝。情。も。感。ず。い。らく。の。氣。と

配ゆ山夏之辱多くと涙分て水一筋と啼りしれば。後右
 形も提げて又く後討進めりて。益州執て歸り行
 り。形ありそるるが且く先子弛し徳右馬のが家業か
 かり。慌しくつふす北の原田郷より南の原田に一行
 又許多人音の軍へるゆに。昨日夜来し。旗人斬
 れ仕まり。是射と看ると。真子走り敵し之をかくす。存
 ねど。知しやと息急くつふ。徳右馬の軍へ大におどろき。
 直又竹太尉が居回一行し。忠六が斬し。夏かくれを。
 竹太尉の是と軍と仰天し。何者うけ忠臣を殺
 せし夏之碑念や。何如なる天罪よ。僕ハ斯ん。上傳

命の夏夏之を重く多と。地は控び天と仰ぎ。恨なりき
 去りし息もあがりず。徳右馬の家内のもめも。俱し涙と
 流し。ろくと脊を掻き。つらりしれば。竹太尉やりし。み
 涙とあし。後を極つ。向ひしや。ハ僕が。と。許年
 者か。世も二人とも有。と。むか。又。離れられ。罪
 手。最期となし。ゆふ。其。骸。も。看。み。慈。母。み。い
 去。年。られ。横。死。と。遂。り。其。二。親。の。仇。を。報。ん。な。め。
 從。人。お。し。に。又。家。僕。忠。六。も。あ。い。何。れ。の。作。も。
 れ。ず。殺。され。今。ハ。鳥。の。翅。も。吾。身。に。あ。る。前。世。の。因。縁。
 斯。ん。刃。の。難。し。死。果。る。所。陰。僕。ハ。敵。の。仇。を。報。ん。と。ハ



あつちのきんぎょ

あつち



あつち

送かうと云て又泣叫ぶ光景は揚々鈴めら竹太夫
い寝て狂気のいづゝ煩倒く例は在り刀とぬき己子自
害えんともゆ一圍宅のものども慍ておどろき怪ぞいそ
旅客何支まておひすや短慮の支まてふと由
りねば竹太夫の大智をいはく言は是非放くはひそ
昔意のいづゝみくもや杖も柱も思ふ家味
と死にれ其上は路費銀は殆失つて財をろは一錢も
るゝ刺さる重き病もとり合せ何と便は仇と報え
や是家の主の心惜の鬼とさるとも志もんべうずと
ちて又うらもめく程刀を身と佛ととて執る

れは數多よりて街をよ刀のけ。徳右男のいふ言
も今短慮なと死にぬ大馬の敵死すよと何事あり
止りを疾ちと養う全快の上は歳又母の雛と復ゆべし時
思六はあらずとも仇と報きんもあらず。又路費のほどい
我れ取替付られぬが必死配多るもやい憂と止る疾の
愈と待て。いざと年齒も不長みのいづゝ中と徳右男天
婦は泣く留りれは竹太夫の家公もさうつてふは誰あ
りと斯に怒るるゝらぬやと。せよあげく泣きさる。斯に
あるづきもあられぬは。徳右男の直子米地主へ通達り
檢屍の上思六の骸を舟送け。是里のやうに子塚とる

あはれむかしの舟に
〇七

厚く僧は供養し。怒はいと似せぬ徳右男の涙は見え
方なく。若太郎ハ輒不祥の涙憎くたり。只首を依て愁
色のそよ病と養て是家の厚情を以て且く茲にあり。
ぞと報仇の時日始後存る

竹十編

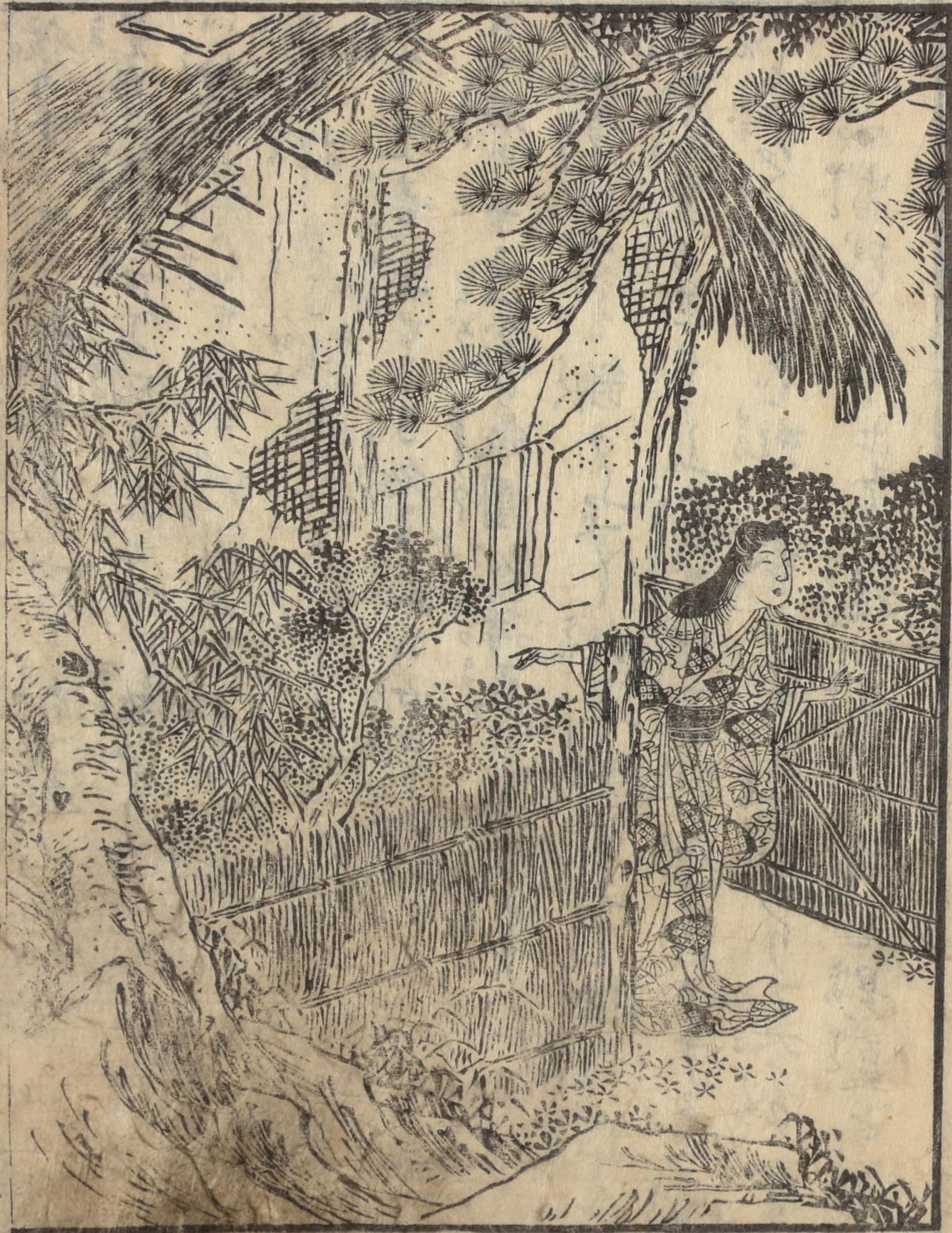
真堵思と詫々々報難と逸
若太郎報報々々本領又飯

却説若太郎ハ忠六の横死は別れ村長徳右男の思と
荷を數日は示し疾と養いつらく医師を招きよ
おしく全快しむる不日よへ平愈つてりれハ大に
後々天の吾と七ざるとおもひありぬ。徳右男も俱に

喜を餘どころものお抱りりるま竹太郎つらくおま
よ。既状を元を得り上一日もなや發足しえ仇が案を
と思ひ一日徳右男夫婦のちの別れんとしハ夫婦ハ名持
御おとてつよ今且く養生しゆりえ。とて氣力をま
し出まらるる。とて思ひ留りれども竹太郎大抵人王志
お得られハ是非行べしと心と定められハ主徳右男も止ま
り手に思ひ何うも心ろぞく。錢別ハ金三十両おくり
路の費みさく。とつバ。若太郎是とつて子に養ふ。おの
ぞハ我が受しお回せんがれハ及し。アとと先度やが
徳右男ハ只首を手に持て行ぬ。我々が寸志をりて推

了度しられれば皆太尉の因縁がらわれれば命子任づく。歎まで
お助子終りし支生を世も忘すお寺付る。報仇のもの
艱苦千辛の世も有なきはわれは辟一錢身は可はずとも。
念徹する所なれば非人乞食とがらるとも大事の果ぬこと
あるべからば。さうれば今家公の贈を及く。深怨を空
くく。及て我々の思はれ多しと深りれば貴意を休め
んため且路費とがらば仇と素の一助ともなさん。なと
宿思成熟るさば再び涙やべくと。厚く涙切送す
別御儀。遂は是受甲村御出及して其より相州
足柄山邊に至る。不意道を失て山中は吟呻ぬ

斯ありをるが。茲は一箇の赤土の小屋。うらうら。もと平日も
夕陽がれば是所にて宿を求め。寝てもいづ。鏡をを養
て。素べくと思ひ。聴て彼家。素ぬを乞われ。内より十
五六の女出迎へ。云々。此所は人宿にて。つらすと。皆太尉
云々。是方も人宿とい。看アされど。行昏れば。頼アうると
と。親女。喜は。此方の婢。われ。私に宿。甲と出
来が。されど。是家の主。此一。面日。他い。内。あ。は。ゆ
一。宿。泊。も。す。づ。き。れ。ど。も。潜。び。て。な。す。り。れ。ば。其。は。し
心。招。め。ふ。べ。今。も。主。婦。か。り。来。ら。ば。看。察。ら。れ。た。ま。は。し
と。よ。な。す。り。ぬ。べ。今。夕。を。過。さ。る。ち。是。く。来。れ。と。す



山崎の女



彼の裏の味曾部屋とものさき方へ連り小女告よし貴客
是内に入つたると用を居久と教つて女見去りぬ官太所
い彼が教は在せと戸用を入る。甚暗しそとの色分
ふを揮う見は床あつて遊し手たる下なり心中と疑
然しそ意告せざる処子前の女見左の午は燈罩と燈
さ右の手は一皿の飯團が持来りて裏又戸用を告
よ貴客さぞ御すよ。此を食し久と彼飯團を
与つて食めを告よ。喜の郎君が看まひするに痛
いとそく信る秘を托も奉るごう一夏ありて今夕なり
かくも宿はしよ。キり。願は喜と怪し是夏と作

かひえやといひ。竹台太郎あつては想す。此女見奇なり。
斯伶惻れよと己が願はたのむる。常の夏もあらず思ふ見
家の孫由が識る有べし。思惟しと言を和らして云
全娘の願は何夏かよ。ねども。身も可し。と答はいと。が
し。乞。諸。が。お。中。え。ん。と。い。ひ。女。見。大。き。に。喜。ぶ。ア。ま。今。日。
陰し。ア。ま。夏。も。ね。が。比。白。は。倍。ア。ま。是。家。の。主。の。娘。は
山賊の自昇なり。名は八雲と云て女なり。外は傳蔵と云
し。一個の男あり。あれは八雲が看目友にて二人は所あり
て住り喜の本真州登米郡稻我村の舊大夫と云ふ御
の女直堵と云ふものなり。去年傳蔵のためは勾引され

是所一連来り檀子と恋婚せしとされども毒新糸の糸と
糸女変け行ふと絶ふ故に且く免し置け婢の娘は仕
毒際け親を走り去んとおもふも不知案内の道は
一知解走り去るが却て捕られ又如何なる夏目子
おとを交を過らんやと思惟し今今日まで空しく是所
はあり。即君明日此所を去りたまり毒が故に父は
是光景に告ぐらんや。され毒が願て侍とてを答
太郎原毒と軍をめぐめて虎兇とて虎兇知得の心
地へは令娘の身の上を憐れ子孫より小人不敏なれ
どもかと思ひて託したまはる事なす。今令娘

の説話に買ひ吾從來ぬるふ所の父母が仇八雲傳前を
り。あか慍しや今もつる解りは吾宿願を遂んぬるを
是も天の祐くる所よし令娘の口は借て我は告
ぐと雀躍して天を拜し地とぞがみられは女児は走ら
ず君は仇を報ゆる人なり。是家の姫と仇といふ
は實悦幸なり。是も貴客の孝心徹し上所なり。
毒もつるは絹し若や今もつる主姫たる木とて
まはるべし必急しとて大事に過しとめれといふ
太郎は更し神佛加護かると彼女児は擇ふ。やま
八雲傳前かたりるは一刀は斬りと勢ふんぞ侍居た

りしに。左側ハもや四更の天色よていと津涼とて寝具
たる所へ表の方より人音の耳へくる。おれ彼奴かりしを
ひき口らつらげ勢ひ猛く待て待て、跳出て一刀をなさん
とおもふ。前の女見おるよきに。さうすべくとつをと思
ひ。さういふる時、女走りこり。身罷てつよは此家
の主、髪ハ垂れ盗賊は出谷より落ちて疵と敷り。今午下の
このに技られえかたり。忙しく其刃を息ありを宿思
を遂ぐ。は接下もの二人後ひおれ。心得たよめて
過ちおふると。気がくさる。つよは。竹太郎いざり。雀躍
またおし。身を挿へて除く。歩を裏口より八雲が

右回廊を空き。覗ハ八雲ハ炉の下に俯し。あり二人の盗を
く。縛り麻手。疵をさき。あちさう血の附をありしと
拭ひ。ろろが竹太おもふ。お僕や。客子うれは。好おぞ
と。腰へ縛りの口。抜持。一声。噎て。窓の扉。蹴やぶ
跳り。入。さ。意。げ。な。き。に。二人の。賊。は。う。ろ。ろ。と。軽。く。う。も。
流石。又。大。口。は。執。向。に。竹。太。勇。と。震。て。圓。斬。り。何。の
苦。も。ぬ。く。一。人。は。斬。り。け。れ。ば。噫。と。後。へ。倒。れ。け。り。お。れ。
今。一。人。の。盗。賊。左。の。腕。より。突。き。け。来。り。け。り。お。れ。
か。り。賊。の。右。手。撲。地。と。お。り。が。刀。ハ。落。て。搦。後。へ。水。お
ま。り。り。八。雲。ハ。是。間。へ。逃。ん。と。う。ろ。れ。ど。も。足。は。落。て。縛。ぬ





其二

本村の右の川

けりりし折れば。動してあては所。されど名たる賊首な
まば。さきさき。燈が。蹴仆し。れば。怒ち。闇と。かろ。て。物の
あやち。見。且。ず。是。お。は。時。よ。し。八。雲。の。浦。復。て。遊。ん
と。せ。し。が。真。堵。火。の。滅。し。る。地。見。て。あ。れ。ば。あ。ろ。ろ。て。け
る。や。躑。て。燈。目。阜。さ。く。白。れ。ば。怒。ち。一。面。あ。く。く。な。り。て。
八。雲。遊。る。夏。あ。く。は。所。答。太。郎。之。を。見。登。壇。み。声。り
け。各。衆。が。川。く。兵。庫。が。仇。と。云。ふ。も。ぬ。く。日。ご。ろ。の。擧。げ
憤。り。刀。猛。て。中。撲。地。と。斬。除。る。に。八。雲。の。言。が。及。す。の。違
も。ろ。く。肩。并。より。脊。中。か。け。て。斬。さ。げ。ら。れ。く。が。噫。と。叫
で。其。身。息。い。絶。り。り。答。太。郎。の。恨。む。の。服。光。四。方。に。完

きて。恨。む。八。雲。が。首。が。討。り。に。又。も。ヤ。表。の。う。さ。み。人
音。の。圓。へ。り。れ。ば。答。太。お。も。う。手。下。の。もの。の。飯。か。も。ん。
あ。れ。も。仇。の。醜。た。れ。ば。一。首。が。並。ん。と。密。に。表。の。方。へ
回。り。出。り。れ。ば。月。皎。々。と。を。松。岡。の。岬。吹。送。る。と。見。て。か。
大。漢。一。人。あ。り。れ。出。で。二。王。立。ち。立。たり。り。り。答。太。大。音
声。て。彼。那。の。山。川。傳。首。な。ん。吾。の。早。川。答。太。郎。母。の
仇。首。さ。く。の。べ。く。待。と。閃。き。り。れ。ば。傳。首。呵。と。打。り。り
母。の。仇。も。ど。い。い。夏。あ。く。く。是。母。と。汝。が。奴。隸。に。出。合。し。が
主人。の。仇。と。呼。て。お。て。暮。ゆ。く。す。が。ぬ。く。一。刀。を。切。と。め。たり。
汝。も。す。と。あ。く。く。命。が。亡。ん。や。と。叫。び。り。れ。ば。答。太。郎

よくなごき廣言時こえ後れと云さま。おせくが 大刀
国光にて忽ち月を映じて光靴りれば。傳蔵急ぎて撃ち
か答太い後受りてに彼国光の刀尖七寸をかり好
くりれば怪しき一道の白気折口より立の危り。傳蔵が
頼み筋を忽ち両眼をくくすめ心神酔がとくに。そ
うが答太突戦秘術を竭しければ。傳蔵は合しうぬて
や撃ち太刀をさたうなむね。答太郎其透け見て一舌嚙
ひて蒐い何とく近き寄たりし。傳蔵が肢軀二段にさ
れ左右へ撲地と散死たり。滅み赤力玉切勇士の手疎
細糸よりく光景あり。斯て答太郎は仇の首二箇を

つて右左に推し又懇に告ぐ女児が伴て茲に去んせ
出る頃、夜にさくくと白くぬれおむろ
芝の分をりれば直に本州へ飯と夜日は強て忙しが
日なかりし。奥州の故郷福島へ飯りし。遂に岩波軍
内祖又健丈は是れ其悦びいんちなる。斯て主人景高
候へ演説を遣りれば景高公縁由が聞て大に悦びの
連み對面あつて稱美の上本録をくたまり安んじ
子ぬ幸に足柄山より偲かりし女児は人かきし。同州
登米郡稻我村稻太夫方へ送りし。後まは女は
嫁に答太郎が事なり。又受甲むの村長徳石場病中

つて右左に推し又懇に告ぐ女児が伴て茲に去んせ
出る頃、夜にさくくと白くぬれおむろ
芝の分をりれば直に本州へ飯と夜日は強て忙しが
日なかりし。奥州の故郷福島へ飯りし。遂に岩波軍
内祖又健丈は是れ其悦びいんちなる。斯て主人景高
候へ演説を遣りれば景高公縁由が聞て大に悦びの
連み對面あつて稱美の上本録をくたまり安んじ
子ぬ幸に足柄山より偲かりし女児は人かきし。同州
登米郡稻我村稻太夫方へ送りし。後まは女は
嫁に答太郎が事なり。又受甲むの村長徳石場病中



慈心も深りぬば厚く大恩が謝に長く親縁を結びたり。
 こりや是は柄山の報仇の夏考括るに僅は口碑の載
 て夏實早川家の氏系書に略其端が記す。又真州
 安達原ハ今六郡に分つ其昔彼ころの徳名よりそ
 茫渺たる山野多し又古哥は鬼こもぬりと喋りて
 貫之が姪和哥好みて其邊に住て住を讀り鬼とい女
 の夏よりて女とふおまれと妻倭名遣の工か時の好事
 符合せしと見え今台今より見え女があふむと
 書聊々夏の過るは報仇の番原に正与記
 樽本報仇安達原冊之六畢



文化四丁卯春

書林

京都

大阪

吉野屋仁兵衛

鈔 屋安兵衛

河内屋儀 助

今津屋辰三郎

